國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕青木敬著『土木技術の古代史』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土生田, 純之, Habuta, Yoshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000386

〔書評〕

青木敬著『土木技術の古代史』（歴史文化ライブラリー453）

土生田純之

著者はかつて古墳築造技術を分析して、列島の東西で大きく二分されること、また必ずしも東西の差異は決定的なものではなく相互に影響が認められ、双方の構築技術を合わせて築造された古墳が存在すること等を論じた研究書を執筆している（『古墳築造の研究―墳丘からみた古墳の地域性―』六一書房二〇〇三年）。

当時評者も同様の研究を進めていたことや当該書籍が博士学位論文であることを知り、その将来性を高く評価して失礼ながら突如長文の手紙を送ったことを鮮明に記憶している。そうした過去の評者の予感が本書の刊行によって正鵠を得ていたことを実証する形となったことをまず喜びたい。その後著者は鎌倉市教育委員会を経て奈良文化財研究所に勤められた。そこで発掘調査に従事した経験が十分に生かされ、寺院建築や宮殿建築への展開及び比較がなされている。

いうまでもなく歴史は連続しており、特定の時代を切り取って論じても、その由来や展開過程を論じなければ研究の意義は半減する。その意味で前著は詳細とはいえ分析対象が古墳に限定されていたが、その後の律令時代にまで対象を広げたため、「地域政権」から古代国家成立に至る過程において土木技術の展開とともに、いやそれ以上に工人集団の把握や組織化など、人の動きを比較検討して古墳時代と初期律令時代の差異を具体的な考古資料から復元することに成功を収めた。

以下具体的な叙述に沿って概観する。三二頁において「墳丘をつくる技術の違いは、埋葬方法のちがい、すなわち葬制のちがいも同時に映し出す」と述べているが、こうした指摘は技術の分析をそれのみで終わらせず技術を用いた人々の心性面の分析の解明こそが重要であることをついている。近年古墳研究は政治的分析に偏重しているが、人々の心情は常に政治的思考のみではない。様々な面を向いており、その分析なくして実際に生きた人々の評価・再生は不可能であろう。前・中期古墳の時代にもヤマト政権に由来する古墳構築技術が導入される例が各

地で検出されている（著者は技術者の派遣を想定する）が、その技術は継続しない。ところが後期古墳の場合、各地で近畿的技術が継続して用いられる。こうして「有力者同士の人格的結合とは別のシステムへ転換した」と指摘しており（八七頁）、個人対個人の人格的結合から「氏姓制度」等の新しい政治的枠組みを示すものとみた。先に政治的分析への偏重を指摘したが、当然政治史も重要である。古墳築造技法の分析がこうした分野の究明にも有効であることを示すものである。六世紀になると墳丘の高さが増し、いわゆる高大化現象を見せるが高大化を支えた技術として土嚢・土塊積み技術（敷粗朶・敷葉工法を含む）の導入を指摘している。ところで墳丘の高大化は中国の北魏を始め、高句麗（中国よりも早く高大化した可能性が高い）や新羅、そして加耶の一部など「東アジアの各地で連動した大きな歴史的潮流のなかで必然的におこった現象」（一〇七頁）と指摘する。本書は政治的分析をはじめ様々な分野の解明を意識した書籍であるが、日本列島にとまらず広く東アジア全体を視座にいれる、つまり地理的範囲をも広げて巨視的に分析する著者の見識の高さが窺える。

後の「畿内」地方では六世紀末頃に前方後円墳築造が終焉を迎え、以後終末期古墳の時代へと進む。この終末期古墳、特にその後半段階（七世紀後半～八世紀初頭）の古墳構築に用いられた工法は、まさに寺院や宮殿の建築と密接な関係を持つ。すなわち版築技術の採用である。かねて飛鳥寺出土瓦の分析等から古代寺院の建築が百済からの文化伝播によるものであることが指摘されてきた。そのことに異議はないが、基壇の詳細な分析によって単に百済系の技術にとどまらず、中国華北や新羅の技術も認められること、さらに用いる土を特定の地（天香久山）から採取するなど、古代人の心性面にまで解明の刃を向ける。先にみた敷粗朶・敷葉工法は古墳のみならず、道路の基礎部分にも使用されており、寺院建築に由来する版築が古墳の墳丘構築に転用されるとともに、築堤技術に多く用いられた敷粗朶・敷葉工法が古墳や道路にも用いられたことを指摘する（一六八頁）。こうしてある技術の展開を古墳や寺院など特定の資料に限定せず、対象を大きく広げている。これは至極当然のことではあるが、実際に検討を加えることはきわめて難しい。著者の貪欲なまでの積極性が前提となった一例である。

一方、分析の手は可視的な分野にとどまらない。寺院の塔を始め高層建築は当然地盤改良を伴う。この工法は掘込地業と称し、基壇直下に掘り込みを設け、その中を土砂で埋め固める。こうしてその上部に基壇を設けても基壇自体が沈下する事態を

避ける工法のことであるが、掘込地業の厚さと基壇の高さの合計、つまり地業総高が徐々に減少する事実を見出した。その上でこうした傾向には地方差がないことから、律令時代の特性、中央（都）の工法が少なくとも国分寺をはじめとする寺院建築（いずれも国家権力の関与が想定される）に採用されていることを指摘した。しかし律令体制も時代が進むと合理化が始まる。つまり、礎石の下部のみを強固にする壷地業等の工法が用いられる。一般的に新技術の採用時には不必要なまでに丁寧な仕様がなされるが、経験を積むにしたがってやがて合理化が始まる。これがさらに進むと「手抜き工法」に至るのであるが、従来文献史の側から考究されてきた律令体制の弛緩が、考古学によっても証明される道を開いたものと思われる。本書ではそこまでの言及はないが、今後ぜひ調査して論及してもらいたい。

以上、本書は古墳時代から初期律令時代までの古墳、寺院、宮殿建築等をはじめとする様々な構築物を対象としてそれらを個別にみるのではなく、双方の技術者の交流を見据えた分析を行っている。また単に技術の分析にとまらず、その背景にある様々な事象にも留意して分析を行い、政治的展開の解明はもちろん、古代人の心性面にも及んでいる。もちろん研究に終着駅はなく、今後も精力的な研究を続けられることと思うが、評者が特に解明を願いたい、そして本書に記載がなかった部分を指摘しておきたい。それは今回古墳時代から初期律令時代までを俯瞰したのであるが、その前後、すなわち弥生後期と律令時代の弛緩期にも解明の刃を向けてもらいたい。すべての時代を解明することは難しいが、評者は弥生時代中期後半以後古墳時代中期までは基本的に同じ経済・文化段階であると考えている（ただし、政治的な部分では古墳初頭以後大きく展開するが）。こうした観点に立って、上に指摘した律令時代の弛緩、すなわち今回対象とした時代に続く時期のみではなく、一部に言及はあるものの極めて限定的な弥生時代の様相にもさらに踏み込んだ分析が望まれる。これを実際に追究することはきわめて難解なことではあるが、著者の探究心をもってすれば必ず成し遂げられるものと思う。

本書評を閉じるにあたって、評者が最も印象に残った部分に触れておきたい。藤原宮内官衙建物（掘立柱建築）では柱の掘方が、数種類の形態的特徴に分類できる。この掘方は立柱の後は当然埋め戻される。こうした見えない部分にこそ工事に従事した作業員の「クセ」が現れる。その結果、作業員固有の「クセ」の抽出から律令体制下の労働力編成のあり方が見通せるようになる。宮殿建築の屋根に葺かれた瓦の分析（瓦当面の文様

や瓦調整技術は同じであっても、例えば調整技術の一環としてのケズリ・オサエなどの強弱等は同じ型式に属するが、相違が認識できる。これこそが工人個々の手癖である）から工人組織の分析に成功した上原眞人の仕事を継承して、文献にあらわれない部分の解明に挑んでほしい。

（四六判、二八八頁、吉川弘文館、二〇一七年九月発行、定価一八〇〇円＋税）